

死蟬をときをり落し蟬しぐれ

藤田湘子

「死蟬のほつたらかしが消えにけり」とともに愛誦句。湘子の自宅「ぼっかてい朴下亭」の朴の木には蟻や蟬が多かつたらしく、囁目句も多いが、私は「死蟬」に惹かれる。

死んでいるのかと思つて落蟬に触れてみると、最後のあがきの様に突然羽を震わせ「おお、生きていたのか」と、胸をつかれることがある。仰天のままもがいていたり、思いの外勢いよく飛び立つものや、またすぐ近くに止まるものなど、落蟬のいのちの様相は色々である。

ベランダや外階段の踊り場でほつたらかしの死蟬。鳥が突つついていたが、ある日忽然と消えていた。

「死蟬」や「落蟬」が、傍題または独立した季語として立てられるといいな、と思う。